

# 江の川水系および高津川水系における生物調査報告

山崎 歩夢・赤木 友一（島根県立宍道湖自然館ゴビウス）

島根県の西部には、一級河川の江の川、高津川がある。島根県立宍道湖自然館ゴビウスでは、これまで展示生物の維持を目的とした採集を行うとともに、両河川における魚類の生息状況についても記録してきた。開館 25 周年を迎えるにあたり、今回、これまで確認された魚種の中からいくつかの希少種をピックアップして、その確認状況についてまとめ、これを紹介するとともに今後の課題についても紹介する。

江の川水系では、計 43 種の魚類を確認しており、この中からタナゴ類（ヤリタナゴ、アブラボテ）、アカザ、オヤニラミについて報告する。タナゴ類は、ばらつきがあるものの、一定の数以上の個体を継続して確認していたが、2020 年以降は減少傾向が続いていると考えられた。アカザは、確認できる年とできない年がはっきり分かれていた。原因については明確ではないが、天気との間に何らかの関係があるかもしれないと考えている。オヤニラミは、調査地がある程度一定であり、毎年一定の個体数も確認できていることから、本種の生息環境は維持されていると考えられた。

高津川水系では、計 29 種の魚類を確認しており、この中から、イトモロコ、イシドジョウ、アカザ、イシドンコ、オオヨシノボリについて報告する。イトモロコとイシドジョウは、年によって確認個体数が大きく異なった。これは、採集地点の選定方法や環境の変化、必要個体数の各年における変化などによるものと考えている。アカザは、本水系における確認個体数が全体に少なかった。これは本種の生態的な特徴とともに、確実に採集できる地点を確立できていない点に起因するものと思われる。イシドンコは、当初の確認個体数に比べて、徐々に減少傾向が続いている。調査地はある程度固定しているが、そこで確認できる個体が減っている可能性があると考えられた。

25 年にわたる調査の記録をまとめるにあたり、特に変化の傾向を考察する上で次の 2 点が情報として不足していると考えられた。①採集個体の体長組成について詳細が分からない。②調査地点の環境について詳細な比較ができない。今後も調査を継続し、10 年後、20 年後に詳しい比較ができるようにするため、これらの課題を現地での調査にかかる負担を抑えつつ、効率的にクリアできるよう早急に形式を整えたいと考える。